

高専と英語合宿

詫間電波工業高等専門学校 講師 森 和憲

はじめに

詫間電波工業高等専門学校（平成二十一年十月一日より香川高等専門学校へ高度化再編）では、実践的英語コミュニケーション能力の向上を目指して、「英語合宿」を平成十六年度に第一回を開催し、これまでに五回行いました。

「英語合宿」とは冬季の一泊二日間、二〇名程度の学生が公共の宿泊施設や学校施設を利用し、外部講師を招いてさまざまな英語活動を行う合宿のことです。

合宿を始めたきっかけは、「日頃の授業ではどうしても文法・読解中心に指導してしまい、生きた英会話を教えることが難しい。かといってホームステイは費用がかかるし、もっと手頃に英語しか使えない環境に学生たちを置くことはできないだろうか？」という教員たちの願いでした。そこですでに長野高専などで行われていた英語合宿の先例にならない、詫間電波高専でも同様の合宿を行うことにしました。

日本語禁止の環境

合宿を始めるにあたって、ゲームなどを盛り込んでとにかく楽しく、かつできるだけ多くの英語を話す環境をつくる、ということを目標として掲げました。そこで授業内容は、英語でカードゲームやボードゲームをしたり、映画の台詞を使ったショート・スキットを作ったりしました。また、合宿施設を利用しての天体観測やウォークラリーも行いました。当然、使用される言語は英語のみに制限され、日本語を使用した場合には、発言一つにつき一〇円徴収というペナルティを設けました。これは食事の時はもちろん、お風呂に入っているときも適用されます。このような設定をすると、慣れないうちはペナルティが怖くて無口になってしまいますが、人里離れた合宿という環境ではどうしても発言しないと二日間を生き延びることができません。そこで学生たちは観念して次第に英語で発言するようになっていきました。これはとても重要なことです。普段の授業では話そうとしてもつい

つい文法のミスを感じて話すことができません。しかし合宿という生活の場では、文法ミスよりも自分の意志が伝わらないことの方が大きなミスなのです。したがって、単語の羅列でもいいので、とにかく英語を使って話そうと学生たちは努力するようになりました。一方、学生だけでなく、教員にとっても英語合宿は英語を勉強する場となります。常に学生の模範となるべく英語を話すので、普段おろそかになりがちな英会話や、英語で学生を指導する訓練ができます。たった二日間ですが、ずっと英語を使っていると、頭が英会話モードになってきて、合宿終了後にはあたかもホームステイの引率から帰ってきたような感覚になりました。このように英語合宿は学生と教員の双方にとって学びの場となります。

より高専に特化した内容へ

合宿も三回目を迎えると形骸化してしまい、学生の応募数も減ってきました。また、これまでの授業内容では、他の高校や大学で実施



レゴの制作風景

されている英語合宿と変わりません。そこで私たちはより「高専だからこそ実現可能な英語合宿」を企画していくことを考えました。幸いなことに、詫間電波高専の電子工学科にはレゴ・マインドストームという、レゴ・ブロックのハイテクロボット版があるということでしたので、これを英語の授業に活用できないかと考えました。レゴ・マインドストームの制作には、レゴを組み立ててロボットの形を作るという作業と、そのロボットをパソコンでプログラミングして動かすという二つの作業が必要です。これらの作業を学生たちがチームになって英語で進めていく授業を私たちは考えました。

英語で制作するといっても、意外と簡単な日本語でも英語で表現することができないこ

とに学生たちは気づきます。例えば「そのグレイのパイプを穴に入れて」と言うときに、パイプという単語が出てこず、代わりにマカロニという単語を使って、「グレー・マカロニ、ホール、イン」と発言する学生がいました。また「白のブロックの上に黒のブロックをのせて」と言いたい時に、「ホワイト、ブラック、オン」といった、黒と白のブロックのどちらが上になるのかわからない発言があったりしました。それでもジェスチャーを交えながら必死で作っているとロボットの形になってくるので、面白くなってどんどん会話が弾みます。このようにレゴ・マインドストームを利用することにより、ブロークンでもよいので、自然と英語を使うようになる授業を展開することが可能になりました。

一方、英語でゲームを行う活動も、ハイテク化が進みました。電子工学科にはNintendo・Wii・Wii Sportsといったテレビゲームがあり、これらを大型プロジェクトにつなげて英語でゲームを行うことにしました。

方法は、学生同士がペアになって、一方の学生が目隠しをしてコントローラを操作し、もう一方の学生はパートナーの目となり英語で指示を出すことにより、二人でゲームを進めていくというやり方です。Wii Sportsはゴルフやボレーリングなどを単純な操作で行うゲームなので、このような活動が可能です。実際にゴルフのゲームでは、「左のラフにボールが落ちた。残り一〇〇ヤード、右から風が吹いている」といった表現が必要となるので、位置や方向を表す英語表現を学生たちに教えることができます。

以上のように、私たちは専門科目にも協力

を仰ぎながら、高専らしい合宿プログラムを組み立てることを心がけてきました。そしてこれらの授業は学生たちの評判も良かったので、普段の授業にも活用しています。つまり英語合宿が普段の授業を変える形となったのです。

おわりに

英語合宿は私たちの学校だけでなく、弓削商船などの他の高専でも行われていますし、和歌山高専と舞鶴高専では合同で行うことにより、学生たちがお互いに刺激合いながら英語を勉強しているようです。このような学校と情報交換を行い、将来的には全国の高専を対象とした合同英語合宿を開催したいと考えています。

例えば商船高専には船があり、洋上講座が行われています。そのような事業の一環として英語合宿を組み込むと面白い企画になるのではないのでしょうか。船の場合、海に囲まれて逃げることができない状態ですので、日本語使用を禁止する空間としてはこれほど適した場所はないでしょう。このほかにも学科や高専間の垣根を越えれば、私たち英語教員が思いつかないようなアイデアがたくさん生まれてくると考えられます。

「高専生は英語力が弱い」とよく言われますが、このような企画を通じて「高専生は英語が使える」と言われるようになりたいと思います。企画を実現するためには時間の調整や引率教員の確保等さまざまな問題がありますが、これぞ高専の英語合宿だ、という合宿を今後展開していきたいと思っています。

